



けんちよう  
末松 謙澄  
(1855 ~ 1920)

謙澄は稀にみる「多才多能の巨人」(門司新報)であるが、その一端である教育界への貢献をみていきたい。

## 「郷土の教育に貢献した謙澄」

謙澄は師の村上仏山の薫陶を受けて教育を重視し、特に道德の大切さを説き、自ら教科

書を執筆、出版した。多くは明治20年代であり、『小学修身』、『高等小学修身』、『末松氏・修身女訓』などがあるが、これらは高く評価されている。

謙澄は明治40年代に「財団法人・豊前育英会」の理事長として寄付金集めに奔走して、多額の育英資金を得た。そして、郷土の優秀な若者たちの勉学を援助し、教育界に多大な貢献をしている。

例えば、大正8年7月3日付けの「門司新報」の記事は「小倉企救に於る育英会募金成績」の見出しで、多くの有志から1万円余の寄付金を受けたが、その分だけの揮毫を依頼され、次々と揮毫用の金屏風、箱書き、紙本が届き、謙澄は疲労困憊を極めたと伝えている。この謙澄の奮闘によって育英資金は潤沢になった。

謙澄の帰郷の際、常に付き添っていた門司新報記者の毛里保太郎の陰の働きも大きかった。毛里は水哉園出身で漢文学にも堪能で、謙澄よりも年少だが、無二の親友であった。

謙澄はほかに「門司新報」紙上で「京都郡人に望む」という記事で、郷土の発展の方策の事例をあげて、奮起を促した。自身も北九州の鉄道、製鉄所、港の建設



末松謙澄が執筆した教科書

などに尽力した。

水哉園出身の教育者とし忘れてはならない人に杉山貞がいる。杉山は明治、大正時代の北九州の教育界にとって大きな功績を残した人物である。小倉南区の出身であるが、慶応2年から始まった第二次長州征伐によって始まった小倉藩と長州藩との戦争の時、山野を駆け巡って奮戦。やがて休戦となると、慶応

3年、水哉園に入門し、6年間、仏山のもとで学んだ。その後、小学校の訓導(教諭)を経て、長崎師範学校を卒業し、小学校、小倉高等女学校の校長などをつとめ、北九州の教育界に貢献した。

杉山貞は謙澄とも親しくしていたが、杉山の没後、「杉山翁教育功績碑」(大正8年)が建立され、謙澄はその記念碑の撰文を書いている。この末松謙澄と杉山貞の二人は教育者としての仏山の教えをみごとに実践した。

(文化人末松謙澄を考える会 城戸淳一)